

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K03027

研究課題名(和文) 校舎内の病弱・身体虚弱特別支援学級担当教員の専門性向上のためのプログラム開発

研究課題名(英文) Program development aimed at improving the expertise of teachers of special support classes for health impairment in elementary and junior high schools

研究代表者

平賀 健太郎 (Hiraga, Kentaro)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：30379325

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、校舎内の病弱・身体虚弱特別支援学級内専門性を高めるプログラムの開発とその検証を行うことを目的としていた。プログラムを開発するために、校舎内の病弱・身体虚弱特別支援学級内の現状と課題を明らかとし、そこで得られた課題を改善する方策について、各教科の専門家への面接調査によって得ることができた。以上の研究結果を踏まえて、校舎内の病弱・身体虚弱特別支援学級内の担当教員向けの研修プログラムの開発・実施を行い、その効果について受講後に質問紙調査をもとに検証を行った。その結果、研修内容に関しては概ね肯定的な評価が得られ、さらに学級担当が集まって受講することの意義に関する言及が認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年の小児医療の進歩や、インクルーシブ教育システムの充実がめざまされる中、校舎内の病弱・身体虚弱特別支援学級の充実は重要な教育課題である。しかし、校舎内の病弱・身体虚弱特別支援学級の学級担任が専門性を高める内容を体系的に学ぶ機会は少なく、現場の実態やニーズを踏まえた研修の機会を整備することが求められている。本研究の成果として、研修プログラムを開発・実施する中で、担当教員の専門性を高めるための効果的な講義内容について提言したことだけでなく、同じ立場の教員が集まって受講することの重要性を示唆したことがあげられ、今後の病弱教育の充実・発展に寄与したと考えられる。

研究成果の概要(英文)：In recent years, the advancement of pediatric medical care and the improvement of the inclusive education system, it is an important educational issue to enhance special support classes for health impairment in elementary and junior high schools. However, there are few opportunities for teachers of special support classes for health impairment in elementary and junior high schools to systematically learn the content that enhances their expertise, and it is required to develop training opportunities based on the actual situation and needs of the field. The results of this research were as follows. As a result of this research, while developing and implementing a training program, proposals were made on effective lecture contents to enhance the specialization of teachers. It is suggested that it is important for teachers in the same position to gather and take the course. This research contributed to the enhancement and development of future education for children with health problems.

研究分野：病弱教育

キーワード：校舎内 病弱・身体虚弱特別支援学級 研修会

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年の病弱教育では、『病院内の教室(院内学級)』に加えて、『小・中学校の校舎内の病弱・身体虚弱特別支援学級』がクローズアップされている。この理由の一つは小児医療の著しい進歩である。かつては予後不良であった病気の子どもが救われたり、入院期間が短縮化されることで、過去と比べて退院後に地域の小・中学校に通うことのできる子どもが増加している。このような子どもたちの中には入院や自宅療養は必要ないが、常に健康な子どもたちと同じ場で教育を受け続けると、健康状態を保てなかったり、病状が悪化したりするリスクがあるために、身体面、学習面、心理社会面の状況に配慮した指導・支援が必要となる場合がある。そのため、小・中学校において、校舎内に病弱・身体虚弱特別支援学級を設置することで、これらの子どものニーズに対応するケースが増えてきた。しかし、その詳細は明らかとなっておらず、在籍する子どもの実態(必要な治療・管理、学習内容、通常学級との交流等)については十分に把握されていない。さらに、校舎内の病弱・身体虚弱特別支援学級の担任が専門性を高める内容を体系的に学ぶ機会が少なく、現場の実態やニーズを踏まえた研修の機会を設けることが重要課題の一つとなっている。

2. 研究の目的

本研究の主要な目的は、小・中学校の校舎内の病弱・身体虚弱特別支援学級担当教員の専門性を高めるための研修プログラムを開発し、その効果を検証することであった。具体的には、以下の3つの研究を行った。【研究1】は、校舎内の病弱・身体虚弱特別支援学級担任を対象としたインタビュー調査を行い、教育実践の実態と課題について明らかにすること。【研究2】は、上記で明確になった課題に対応するために、教科教育の専門家を対象としたインタビュー調査を行い、校舎内の病弱・身体虚弱特別支援学級での教育に各教科の専門性がどのように応用できるかについて明らかにすること。【研究3】は、上記の【研究1】と【研究2】の研究結果を取り入れた校舎内の病弱・身体虚弱特別支援学級の担任向けの研修プログラムを開発・実施し、その効果を検証した。

3. 研究の方法

【研究1】学級担任の教育実践における現状と課題

校舎内の病弱・身体虚弱特別支援学級担任を対象として、教育実践における現状と課題について半構造化面接を行った(一部アンケート調査)。

【研究2】一般の教科教育の専門性の病弱教育への応用可能性

複数の教科教育の専門家を対象として、半構造化面接を行った。具体的には、研究1で明らかとなった校舎内の病弱・身体虚弱特別支援学級内に在籍する子どもの特徴や教育実践上の課題についての説明を行い、そのうえで、校舎内の病弱・身体虚弱特別支援学級を利用する子どもへの教科指導の工夫に関するそれぞれの専門性に基づくアイデアやノウハウを聴き取った。

【研究3】研修プログラムの開発とその効果の検証

【研究1】と【研究2】の成果を踏まえて、研修プログラムを開発し、その効果を受講後の質問紙調査によって検証した。

4. 研究成果

【研究1】学級担任の教育実践における現状と課題

得られた内容の共通性や個別性に着目しながら実態や課題を整理した。教育を行ううえでの不安や困難さについての代表的な内容としては、「病気の管理について」、「集団活動の経験が少なくそれに慣れるための配慮について」、「新型コロナウイルスを含む感染症への配慮について」、「リモート授業への対応について」、「特定の教科指導の困難さについて」、「保護者の希望に寄り添う程度の判断について」、「学校内での病弱教育への理解の不十分さについて」、「教員自身のメンタルヘルスの維持の困難さについて」があげられた。それぞれへの対処方法については個別性が高く、各ケースの児童生徒の実態や学校の状況、および個々の教員の教育観や経験によってさまざまであった。不安や困難さに関する言及が認められた一方で、ポジティブな側面に関する内容も多数認められ、「病弱・身体虚弱特別支援学級に在籍することで、本来持っている力を引き出し伸ばすことが可能であること」、「健康な子供が享受している学校での楽しい経験を提供することができる」などの内容が報告された。

【研究2】一般の教科教育の専門性の病弱教育への応用可能性

各教科の専門家からは、学習指導要領に即した内容や、各教科において注目されている現代的課題などについて、専門用語を交えて具体的な内容が語られた。各教科で固有の内容も認められる一方で、教科を問わず共通する内容も多く認められた。特に、「子どもたちが集団で学習することの意義」、「1対1で指導することのメリット」に関しては、多くの回答者からの言及が認められた。その中で、校舎内の病弱・身体虚弱特別支援学級での教育の特徴を鑑みると「本来は周

囲にいる子どもの役割を教員が担うことで、子どもが集団の中で享受する多様な活動を経験しやすくなること」。「オンラインシステムやICT機器を活用することで、複数の子ども同士での主体的・対話的で深い学びを可能とする方法があること」の重要性が示唆された。得られた内容から、各教科の専門性は、校舎内の病弱・身体虚弱特別支援学級への指導に活用できることを指摘した。

【研究】 研修プログラムの開発とその効果の検証

研修プログラムについて、実施方法と講義内容について検討を行った。実施方法については、まず受講生が日々の教育活動についてグループに分かれてディスカッションを行い、続いて各グループによる発表が行われた。その後の講義内容については、以下の4つの内容から構成されていた。(1) 個々の疾患の特徴に応じた支援の必要性、(2) 病弱児に共通する心理特性とその支援の必要性、(3) 治療内容や心身の状態に応じた支援の必要性(学習内容の精選と学習環境の整備、体験的な活動の制限に対する教材・教具の工夫、少人数での指導における工夫)(4) 校舎内の病弱・身体虚弱特別支援学級の意義についてであった。なお、講義全体を通じて、教室の写真やイラストを用いることで、視覚的に理解しやすくなるよう工夫を行った。

受講後の質問紙調査における自由記述式の項目については、集積された回答にはそれぞれ類似した内容が認められ、複数の専門家によって整理を行った。その結果、今後の教育実践に参考になった代表的な内容として、「個別性が高い教育であることの理解」、「実態把握の重要性とその方法について」、「病気の子どもの心理面へのサポートの重要性」、「子どもの頑張り和我慢に注目した視点」、「子供が多様な役割を担える工夫例」、「教員の視線・意識が常に子どもに向いていると感じにくい工夫例」、「教員の個性を活かした心理的支援を行うことの重要性」、「自尊感情の状況に応じてかかわりを変えることの重要性」、「褒めること・叱ること・認めることのバランスを意識すること」等があげられた。

今後講義で扱ってほしい内容として、「学習空白への対応」、「病状に即した学習内容・方法」、「自立活動で設定する具体的内容」、「心理状況に即応したかかわり」、「子どもの主体性を促す工夫や留意点」、「子どもとの心理的距離の保ち方」、「体調不良と甘えの見極め」、「学習面や将来展望等の現実認識力の不足」、「自宅療養中の学習のフォロー」、「治療に起因する障害への対応」、「健康な子どもたちとの交流に関する内容」、「途中から集団活動に参加する際の留意点」、「担任のメンタルヘルスの維持の方法」、「学内での特別支援教育の重要性の啓発」、「担任の役割や負担の周囲への伝え方」、「担当教員不在の際の対応」、「担任変更の際の引継ぎ」、「保護者の要望への応え方」、「医療者との関係性の構築」、「学外関係者相互の意見の相違について」、「活用できる社会的資源」等があげられた。

校舎内の病弱・身体虚弱特別支援学級担当教員同士が集まって研修を受けることの意義として、「病弱教育固有の現状や課題について解消・解決するヒントが得られる」、「自分のかかわりが間違っていないことが認識できる」、「自分のかかわりとは別のアプローチ方法があることに気づいた」、「自分と同様の経験や悩みを抱えている先生方がいることを知ることで安心できた」、「同じ立場の教員に自分の悩みを聞いてもらえたり、アドバイスが得られる」、「校内では病弱教育について話し合える機会が少ないが、同じ立場の教員との交流は嬉しい」等が認められた。

【まとめ】

研究期間を通じて、校舎内の病弱・身体虚弱特別支援学級を担当している教員の回答と教科教育の専門家の回答とを統合した研修プログラムを開発・実施したことは、本研究の成果である。これまで教室の設置数が増加していることは把握されていたものの、その実情が十分に明らかとなっていなかった中で、在籍する子どもの実態や教員のニーズを踏まえて研修プログラムを開発したことは本研究の独自性の一つである。また、教科教育の実践家・専門家からアイデアを聞き取り、それぞれの専門性やノウハウを病弱教育にミックスするための方策を得ることができたことも本研究における特色の一つである。さらに専門性を高めるための研修プログラムを検討し、受講者の評価によってその効果を検証した結果、研究全体の目的は十分に達成されたと考えられた。ただし、受講者の経験年数や担当児童生徒の背景(病気の特徴や、発達の段階、併せ有する障害の特性等)に即した内容等)ごとに研修内容を準備する必要性が示唆された。

また、研修プログラムの実施形態として、多数の校舎内の病弱・身体虚弱特別支援学級の教員が参集して受講すること自体に、大きな意義があることが示された。校内には病弱教育の対象となる子どもは一名しか在籍していない状況で、担当教員も一人であることが多く、孤立感をいだきながら働いている教員が少なくなかった。同じ立場にある教員同士が集まり、交流するメリットとして、勤務校では一人で抱えがちな困難を共感しあえる仲間がいることを実感でき、その中で今後の教育実践ですぐに活用しやすいアドバイスが得られることがうかがわれた。学内に相談できる関係者が見あたらず、不安や苦労を共有できる相手も少ないと感じていた中で、一人で解決するしかないと思っていたことが承認される経験をする中で、日々の苦労が報われたと感じたり、ひいては仕事へのモチベーションが高まることが示唆された。今後は、多様な個々のニーズに対応する研修内容を準備することに加え、オンラインも含めて受講生が研修数に継続的に交流できる仕組みを設けることが重要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計3件

1. 著者名 平賀健太郎 編著者：坂本 裕	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 205
3. 書名 特別支援教育ベーシック	

1. 著者名 平賀健太郎 編著者：岡崎伸・合田友美・西田千夏	4. 発行年 2023年
2. 出版社 大和出版	5. 総ページ数 127
3. 書名 家族の声・専門家の体験から学ぶ 小児緩和ケア児と家族支援のヒント	

1. 著者名 平賀健太郎 編著者：吉利宗久・千賀愛	4. 発行年 2023年
2. 出版社 培風館	5. 総ページ数 220
3. 書名 特別支援教育・インクルーシブ教育のかたち	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------